
性病の功名

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性病の功名

【Zコード】

N9793A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

自分の意志を他人に伝えるのが苦手な僕はヘルペスに感染し、性器に耐え難い痛みを覚える。僕にそれを伝染させたのはザクロという名の風俗嬢だった。僕は苦痛の渦中に彼女の事を思い出す。そしてーー。

ヘルペスに感染した。

それは性器に感染するタイプのヘルペスであった。初めは、亀頭と包皮の境に小さな傷が出来ただけだった。僕はマスター・ベーションを朝と晩の一度は最低でも欠かさない成人男子であつたし、時間が余っている時は五回も六回も繰り返すので、この手の事はしそつちゅうあつた。つまり、性器に負担をかける傾向にある人間だつたという事だ。

放つておけば自然治癒すると思い、僕は放つておく事に決める。しかし、いつまでたつても、その傷は癒える事なく、日に日に痛みを増していく。さらには、傷が増えしていくのだ。包皮を中心に、水泡のような丸い傷が、赤い点となって、僕の性器を浸食していく。僕は大学生だったので、その日は講義を受けていた。確か、社会福祉論という名のついた講義だつたと思つ。

バリアフリーについて、まだ若い三十代の講師が熱弁している時に、ついに僕の痛みは耐え難いものにまで発展した。

なかなかに大きな講堂であり、僕は中間くらいの列に座つていたのだが、出口まで歩く事が、その時の僕には、水分を失つた状況で数百里先に見えるオアシスを目指して旅をするキャラバンと同じくらいの熾烈を極める。

ようやく扉を開けたところで、僕は廊下に倒れ込む。

股間を押さえ、悶え苦しんだ。金髪で濃い化粧の女子学生が、僕を怪訝そうに覗き込んでいる。僕は助けを求めるようと思ったが、一休どのような救助支援が有効であるかが解らなかつたし、そもそも女性に性器の激痛についての説明をする事に、この激痛に等しい恥辱を感じていたので、何も言わず、継続して悶え苦しむ事にした。

その女生はしばらく僕を眺めたあとで、その場を去つていった。僕は彼女を特に恨む事はなかつたが、出来れば男性か医務室の職員

を呼んできて欲しいと願つた。そして、何故それを彼女に要請しなかつたのだという事に気付き、激しい後悔の念に駆られた。

僕は昔から、己の意思をはつきりと他人に伝える事が苦手な人間なのである。

その後、結局講義が終わるまで僕はその場で悶え苦しんでおり、講義の終了とともに講堂からゾロゾロと出てきた学生達の数名に助けられ、医務室へ運ばれる事になる。

そして結局、僕は医務室の職員に性器をさらけ出す屈辱に耐えねばいけなくなった。その職員は、白衣に身を包んだ三十代前半の女性である。

「ああ、多分、ヘルペスね」

彼女は性感染症のヘルペスについて語った。多々ある性感染症の中でも、自覚症状が最もストレートに伝わる種類のもので、痛みは放つておいてもひと月くらいすれば自然に消えるが、あたり前ながら泌尿器科に行ってキチンと治した方がいいという。

僕は礼を言って、ゆっくりとズボンを上げた。生地が僅かに触れただけで、それこそ失神しかねない痛みなのだ。

「ちゃんと避妊具使いなさいよ」

彼女は、僕にセックスのパートナーがいて、その人物から感染したと勘違いしていたが、面倒だったので、僕はその勘違いについて釈明はしなかった。

紹介された泌尿器科は全て診察時間を終えていた。つまり、僕は明日までこの激痛に耐えなければならないのだ。

フラフラになりながら、電車に乗つた。手すりにしがみついていた。苛ついていた。電車が僅かでも振動すると、加速度的に股間の痛みが増していく。僕はその度、運転手を呪つた。

恐らく、一週間前に行つたピンクサロンが原因だろう。僕には付き合つている異性がいないので、当然ながらセックスなど数年していない。

ピンクサロンは学割の効く風俗として、大学の友人達の間でも人

気のスポットなのだ。

トランスマジックが大音量でスピーカーから流されている薄暗い部屋の中で、客はいくつも設置してあるソファーのいずれかに案内される。そこへ座って待っていると、これはピンクサロンによつてまちまちだが、大抵はセーラー服に身を包んだ女の子がやつてくる。

申し訳程度の会話を楽しんだ後に、女の子は半裸、あるいは全裸になつて、客の膝に跨つて、キスをしたり、乳房を揉ませたりと、多種多様なサービスを行い、最後に口を使つたオーラルセックスをするというのがセオリード。これらは大体三十分の間に行われる。その時、僕についたのは同年代の女の子だった。指名も可能だが、それには一千円の追加料金が必要なので、僕や友人のほとんどはフリーで通つていた。

薄暗いので、顔はよく見えなかつたが、薄化粧の和製美人であつたように思う。ピンクサロンで働いているにしては珍しい雰囲気だな、という印象があつた。

そういうえば、確かに彼女は辛そうに僕の性器をしゃぶつていた気がする。そうだ。あんまり体調が良くないの一。席に付くなり、彼女はそのような事を言つていた。

僕は家に帰ると、ベッドに倒れ込み、夕食も採らずに悶えていた。悶えながら、僕についたその女の子の事を思い出した。思い出せば、少しは気が紛れると思ったのだ。

名前は、ザクロ。そのピンクサロンは女の子に果物の名前を付ける事で知られている。

僕はザクロとした会話の記憶を断片的に蘇らせる。

「あんまり体調良くないの」

「そうなんだ。それじゃ無理しなくていいよ

「ありがとう。優しいんだね」

「そんな事ない」

「優しいのはいいけど、心にも思つてない事ばっかり言つてると

後悔するよ

後悔していた。どうせなら、あらゆる無理難題をザク口に強制させるべきだった。それでもこの痛みに比べれば、まだまだ生温いはずだ。

「辛いの？」

「大丈夫。仕事だから」

そう。ザク口には接客力が欠如していた。恐らく、指名もあまり取れていなかろう。

僕は、ハズレを引いたと落胆していた。しかし、四千円も払っているのだ。射精にのみ神経を集中させる。

「お疲れ様」

僕の精液を口から辛そうにお絞りに吐き出すザク口に、僕は労いの言葉をかける。本来かけたい言葉は罵声であった。

「だから、心にも思ってない言葉ばかり言わないで」

つまらなそうに、ザク口はセーラー服を着て、僕の精液まみれのお絞りを抱えて下がる。

チーン店のピンクサロンでは、終了時に女の子のメッセージが書かれたカードが渡される。

「心にもない事ばかり言わないで ザク口」

ザク口はきっと何かに自棄になっていたのだろう。このカードを僕が店に提出したら、一発でクビだ。

「冗談じゃない。僕はそんなふざけた接客を受けながら、このような痛みまで伝染されたというのか。僕はザク口を呪った。痛みが増せば増すほどに、呪いが比例して膨れあがつた。

携帯が鳴る。大学の友人の一人の名前が液晶画面に表示された。僕はこの友人が苦手であった。何というか、物事を自分の意志の赴くまま、強引に進める傾向にある人間なのだ。

僕は、やはり彼のそういう強引さに、幾度も振り回されてきた。

「もしもし」

「お前、明日の合コン来れんだろう？八時に町田な」

「ごめん。体調崩しちゃって」

「あ？ これねーの？」

「ごめん」

「はあ？」

「マジごめん」

「てめえが来れるつったんだろ？ 責任とれよ」

苛つき——痛みが、普段よりもその増幅を助長させていく。

「だから、ごめん」

「マジありえねえよ。頭数揃わなきゃ向こうのテンションさがんだろうが。てめえがこれねーならキチンと代わり用意しろよ。てめえと同じくらい数合わせに丁度いいやつ」

怒り——苛つきが初めて、それに昇華されていく。

「うるせえよ」

沈黙。痛みが、瞬間、スッと引いた。

「あ？ 何だつて？」

心臓の鼓動が猛スピードで速まつっていく。不思議と心地良かつた。

「うるせえよ。

数合わせくらいでめえで集める。その程度も出来ねえで仕切りが文句言つてんじやねえ。俺が行けねえのは不測の事態なんだよ。つーかてめえにも責任あんだよ。グダグダ言つてねえでさっさと集める。それから一度と俺に電話すんな。学校で会つても声かけんな。てめえのツラ見んのはもうウンザリなんだよ」

先週、僕は自分の予定を反故にして、この友人に付き合ひ、ピンクサロンに行く事になつたのだ。

「お前、次会つたら殺すぞ」

「殺せよボケ。何べんでも殺せ。それでてめえとは終わりだ。せえせえするな。ああ、そういうこないだてめえが目えかけてたあの専門の女な、てめえの事本気でキモいつて言つてたぜ」

僕は通話を切つた。痛みが戻つてきたが、先程に比べれば耐えられないという程でもない。

多分、僕は近い内にこの友人から暴行を受けるだろうが、特に恐

怖は無くなっていた。そこで受ける痛みは、このヘルペスの足元に及ばない程小さなものだろう。僕は携帯の電話を切つて眠った。

次の日、泌尿器科で検診を受け、飲み薬と塗り薬をもらつた。薬の効果は絶大で、僕の性器は一週間程で元に戻る。

そのさらに一日後、一日の全ての抗議が終了した講堂で、例の友人から様々な暴力を受けた。顔面を机に何度も叩きつけられ、頸に膝蹴りを食らい、腹を拳で殴られた。彼と僕とでは体格差がありすぎたので、僕は特に抵抗しなかつた。

一通りの暴力を僕に加えると、満足したのか、彼は講堂を去つていった。僕は机にしばらく突っ伏した後、出口まで歩いたが、廊下に出た所で膝が折れ、仰向けに倒れた。

化粧の濃い金髪の女学生が、倒れた僕を上から眺めている。この前、ヘルペスに悶えていた時に、やはり僕を眺めていた女学生だ。よく見れば、それはザクロだった。

化粧を施し、髪を金色に染め上げて、印象が大分変わっているが、確かにザクロだ。

大学生がピンクサロンで働くという事は、別に珍しい事ではない。僕はザクロにどんな言葉をかけようか迷つたが、とりあえず、一番最初に思い付いた言葉を選ぶ事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9793a/>

性病の功名

2010年10月8日22時24分発行